

生活環境と自然イメージ

水島 恵一*・鈴木 賢男**・原田 和幸***・佐藤 ひろみ****

Living Environment and It's Natural Image

Key words: Living environment, Purpose of life, Life concerns, Interests, Image

Keiichi MIZUSIMA, Masao SUZUKI, Kazuyuki HARADA, Hiromi SATO

キーワード：居住環境・生活目的・生活関心・趣味・イメージ

要約：本論は生活環境と自然イメージに関する研究の第1報として、質問紙による統計的解明と面接を含めたケース研究を行ったものである。A：統計研究では、まず単純集計結果として、「現住所の住居環境」については快適さが指摘された。また「好きな場所」では、「都市」とともに「自然」が好まれていた。このほか「望んでいること」として「人、自然とともに生きる心性」といえるようなもの、その他数多くのことが示された。

次に B：因子分析結果では居住環境イメージには平穏性、開放性、慰安性、清潔性、安全性の5成分、生活目的イメージには家庭重視、感性重視、肩書重視、学術重視、消費重視、平穏重視、社会重視の7成分が仮定されることがわかった。これらの成分（因子）を各イメージの下位尺度として合成得点を得ることで、全体として、居住環境では平穏性が、生活目的では消費重視が、高いことが認められた。

これらのことは、ケース研究において具体的に裏書きされて、各々の特性が、個人の生活において意味深い相関関係にあることが示されている。

1. はじめに

生活環境と自然イメージについては、今までにも多くの研究がなされてきた。例えば栗田浩之

* みずしま けいいち 文教大学名誉教授
** すずき まさお 文教大学人間科学部非常勤講師 客員研究員
*** はらだ かずゆき 目白大学人間福祉学部准教授
**** さとう ひろみ 文教大学人間科学部

(1977) は「雑然とした日常生活の現実」を「イメージの中でカタルシスする」快適さを日本人にかなり普遍的なものとして見出している。また高田公理 (1978) は日本人は「環境」という言葉から「自然」をまず連想する傾向にあるとみている。さらに高田 (1979) は「くつろぎ」のイメージについて、季節や、家の内外の様子、とくに窓から見た庭の風景などについて面接研究を行い、日本人の「くつろぎ」が「自然」に大きく依存していることを記している。一方本田時雄 (1989) は 20 世紀末の日本の女性のイメージ調査から、いわゆる「女性性」の受容率が高く、「恋愛・性・結婚」についての意見としては「性関係を伴わない恋愛を経ての結婚」が最も望まれているとしている。なお本田は発達のないし歴史的にも女性のイメージを考察し、20 世紀前半「男女7歳にして席を同じうせず」という時代からの様々な変遷、さらには「男のくせに」「女のくせに」という時代を経て二十世紀末に至ったこと、「生まれ変わるなら女性がよい」という率も上がってきていることを指摘している。

また、泉敬子、佐藤ひろみ、中林みどり (2005-7) の 103 例のアンケート調査では、高齢者の生活意識として、「心身両面の健康維持」、「愛・創める・耐える」「生涯よく生きる」などをまとめとしてあげている。

なおイメージ研究としては、基礎心理学的研究から、心理学領域全般にわたって、日本イメージ心理学会の「イメージ心理学研究」に数多くの研究が報告されており、本論の参考にもなっている。

人間性、感情などの、臨床・人格研究については、例えば鈴木賢男他 (2009) が『「感情イメージ調査」についての研究 (II)」で、水島恵一 (1979) の考案した「図式的投影法」を用いた上杉喬・佐々木正宏 (1979) の研究の感情価の因子分析を受け継ぎ、因子負荷量の検討を行っている。他に上杉 (1981) の基底的感情イメージとパーソナリティとの関係でも感情価の知見が得られている。一方水島 (1988) はイメージを、その認知心理学的基礎から人格・臨床心理学的領域までを含み、イメージ面接、図式的投影法なども展開している。イメージの社会・文化的研究としては、藤岡 (1974) の「イメージと人間」などがあげられる。

本論は以上の先行研究を参考にしながらも、独自の視点から「生活環境」「自然環境」の問題を、とくにイメージの観点から明らかにしようとしたものである。

2. 方法

「イメージに関するアンケート調査」を、2010 年 5-7 月にかけて実施し、491 例の回答を得た。その結果にもとづき、A、統計的検討と、B、ケース研究を行った。今回はそのうちの一部を報告する。

A、統計的検討として、本論にかかわるアンケートの概要は本論の末尾に記す。

B、ケース研究としては、2 例をとりあげ、(電話を含む) 面接をも用いた。統計に用いた 5 質問についてであるが、関連することは、その他の質問項目も参考にした。

3. 結果 1：統計研究

質問 1 - 2 被験者の性別は男性 159、女性 329 で未記入が 3 例である。

年齢は 18、19 才が 81、20 才代 302、30 才代 11、40 才代 27、50 才代 28、60 才代 19、70 才以上 19、未記入 4 である。

職業は 学生・生徒 383、サラリーマン 60、主婦 19、その他 29、未記入 1 であり、全体の約 80%を大学生が占めている。

質問 1-4、現住所の居住年数は、1 年未満 51、1-5 年 167、6-10 年 74、11-20 年 141、それ以上 55、未記入 3 となっている。5 年未満の人が多い。

質問 2-1、現住所の住居環境については「日当たりがよい」「静か」がそれぞれ 268、258 と最も多く、快適さが強調されているが、この両者とも、後述（表 1）のどの因子の項目にも含まれていない。

質問 2-2、住居のイメージについては、16 項目に分散しているが、「落ち着く」が 346 と、選択が突出して高い。「開放性」の因子項目である。ついで「暖かい」155（慰安性因子）、「狭い」135、「自然が豊か」124、「広い」110（以上 3 項目＝開放性）、となっていて、その他は 100 以下である。

質問 2-3、「好きな場所」では「カフェ」187「ショッピングモール」162、「喫茶店」136、「カラオケ」109 が多く、「公園」219「森林」166「小川」124「神社」109 も多い。他は 100 以下であった。都市生活とともに自然が好まれている。

質問 2-4、「よく行く場所」では、「コンビニ」266「スーパー」223、「ショッピングモール」151、「カフェ」123、「居酒屋」108、「レストラン」106「カラオケ」102 であり、さらに「学校」227、「鉄道」119 が多く、他は 100 以下であった。

質問 3-1、「都市生活の好悪」では 5 段階評定を用いたが、第 2 位の「好き」が 38%と最も多く、（上位から 5 → 1 と得点化したときの）平均値は 3.7 であった。

質問 3-2、「自然とのふれあいの好悪」でも 5 段階評定を用いたが、第 2 位の「好き」が 47.9%と最も多かったが、最上級の「非常に好き」も 33.6%と多く、上述と同じ平均値は 3.9 であった。

質問 6、「趣味」では、「読書」272、「CD・DVD」241「TVを見る」204、「ホームページ閲覧」192、「ゲーム」116、「家で音楽鑑賞」176、「写真・デジカメ撮影」112、「楽器を奏でる」103、「スポーツ」は「見る」が 108、「する」が 122。また「旅行」は 157、「自然のあるところの散歩」151 が多く、他は 100 以下であった。

質問 8-1、「関心事」では「友人関係」280 が最も多く、ついで「恋愛・異性関係」216、「ファッション」216、「勉強」207、「アルバイト」204、「就職活動」184「仕事」154 が多い。「心の健康」252、「身体の健康」191 も多く選択されている。

この他、100 以上の選択のあったものは、「教育」164、「芸術」142、「クラブ活動」128、「家事」109「社会情勢」109、「思想・哲学」107 であった。ちなみに「福祉」の選択は 98、「パソコン」は 95 である。

質問 8-2、「望んでいること」の回答としては、
「自分や家族の幸せな暮らし」が 397 と最も多く、
「便利で快適な暮らし」が 262
「好きな仕事や趣味を生涯続けること」が 305
「身近な人の幸せな暮らし」が 222、

なお「人の心のニュアンスを感じとること」が262該当となっているが、これは並んで記されている「人の心のニュアンスを感じとること」「自然のニュアンスを感じとること」と理論的にも、統計上も関係が深く、「人、自然とともに生きる心性」といえるようなものが示されているといつてよいであろう。

なお以上の因子分析結果では、まず表1上段にみられるように「平穏性」「開放性」「慰安性」「清潔性」「安全性」の5因子が検出された。また生活目的イメージには、表1上段にみられるように「家庭重視」「感性重視」「肩書き重視」「学術重視」「消費重視」「平穏重視」「社会重視」の7成分が認められた。

以上の結果を、年齢別・性別、また居住年数別に見たとき、因子負荷量との関係で次のことが有意に明らかになった。すなわち、

女性＝慰安性（つつまれ、暖かい）・家庭　　男性＝肩書き、学術
 31才以上＝慰安性・清潔・肩書き・社会重視　　30才以下
 長期居住＝平穏・開放・慰安・感性重視・社会重視

この他、次の相関が見出せた。

平穏性＝神社に行く
 開放性＝喫茶店・居酒屋（マイナス相関）
 慰安性＝百貨店・ショッピング・モール、森林・湖沼・池・寺
 清潔性＝鉄道
 安全性＝居酒屋・カラオケ

表1. 居住性に関するイメージの回転後の主成分負荷量と複数回答法による選択

項目内容	因子					選択率 (%)
	平穏性	開放性	慰安性	清潔性	安全性	
08. 落ちつく	-0.72	.12	.07	-.14	-.14	70.5
09. 落ちつかない	.64	.02	.04	-.03	.18	4.9
15. 無機質	.52	-.03	-.02	.23	-.34	3.5
02. 仮り住まいのよう	.52	-.19	-.18	-.14	-.02	12.0
04. 広い	.02	.77	.06	-.08	-.02	22.4
05. 狭い	.16	-.60	-.08	.10	.26	27.5
03. 自然が豊か	-.18	.58	-.04	.02	.19	25.3
01. 包まれているよう	-.07	.03	.80	.10	-.07	13.1
10. あたたかい	-.08	.06	.73	-.20	.03	31.6
11. 冷たい	.25	.11	-.05	.67	-.05	5.5
07. 汚い	-.13	-.24	.08	.59	.27	9.2
06. きれい	.07	.34	.24	-.45	.07	19.8
14. プライバシーがない	.19	-.12	-.08	-.14	.67	9.4
16. 災害の不安がある	.00	.10	.04	.24	.65	6.7

表 2. 性別および年齢区分、居住年区分別による 3 領域のイメージにおける因子合成得点（平均点）

イメージ成分 (因子)	性別		年齢区分				居住年区分					
	男性	女性	18~20	21~30	31以上		4年未満	5~16年	17年以上			
I 居住環境	平穏性	0.10	0.10	0.09	0.10	0.12		0.07	0.11	0.13	***	
	開放性	0.04	0.06	0.05	0.04	0.08		0.03	0.05	0.09	*	
	慰安性	0.12	0.19	**	0.15	0.16	0.22	*	0.11	0.21	0.20	***
	清潔性	-0.01	0.00		-0.01	0.00	0.03	**	-0.01	0.01	0.00	
	安全性	-0.05	-0.06		-0.06	-0.07	-0.03		-0.05	-0.04	-0.07	
II 生活目的	家庭重視	0.24	0.28	**	0.28	0.26	0.25		0.27	0.26	0.28	
	感性重視	0.27	0.25		0.25	0.25	0.29		0.26	0.23	0.30	*
	肩書重視	0.10	0.02	***	0.04	0.07	0.02	*	0.04	0.05	0.05	
	学術重視	0.05	0.02	*	0.02	0.04	0.03		0.03	0.04	0.02	
	消費重視	0.36	0.36		0.40	0.41	0.20	***	0.40	0.34	0.33	
	平穏重視	0.28	0.24		0.26	0.22	0.30	*	0.26	0.24	0.27	
	社会重視	-0.04	-0.05		-0.06	-0.05	0.00	**	-0.04	-0.06	-0.02	*

4. 結果 2：ケース研究

A ケース 1 28歳 女子 サラリーマン

現在の住居の居住年数は 9 年、居住環境は 静かで 日当たりがよく、眺めもよい。

きれいだ が「仮り住まい」のようで、冷たく、無機質 だとしている。

近隣の好きな場所としては、繁華街、スーパー、喫茶店、居酒屋、レストラン、ショッピング・モール、鉄道、森林、小川、公園 があげられている。

「好悪の 5 段階評定尺度」では、「都会生活」も「自然とのふれあい」も最上級で「非常に好き」とされる。上述の「好きな場所」で、都会施設、自然がともに多く選ばれていることと、機を一にしているとみられる。

「趣味」については、読書、漫画、TV（を見る）、ネット・サーフィン、美術館、絵を描く、家での音楽鑑賞、音楽会（に行く）、楽器を奏でる、となっていて、趣味の多い方だといってよいであろう。

なお本論の統計研究では省略した「近くの川、鉄道の、沿岸・沿線」の風景を「楽しんでいる」とされ、ともに「思い出」も多少あるとされる（川については故郷の「きれいな川」に飛び込んだことなど）。ここでも都会、自然が ともに好まれていることがうかがえる。

本人は、著名な高原の茶屋に育ち、かつ東京での学生生活も経て、研究活動にも参加しており、こうした背景のもとで、自然も文明も享受しているものとみられる。

ちなみに本人が「宗教心」について語り、記述したことの概略を次に記す。

「小さな頃から、人の生死や、起きている時に見る夢について悩んでいました。」家は仏教だが幼稚園はカトリックで、次第に「教え」に疑問を持ち始めたという。「身体があるだけで生きているといえるのか。意識があるから生きているといえるのか。」

「幼稚園から中学まで そんなことばかり考えていましたが、わかりませんでした」という、そして成人しても「自分が天から導かれたり守られているとは思えません」と結んでいる。

B ケース 2 62歳 女子 サラリーマン

現在の住居の居住年数は 10 年以上、居住環境は 静かで 眺めもよい。

近隣の「好きな場所」としては、森林、小川、公園 があげられている。

「好悪の5段階評定尺度」では、「都会生活」も「自然とのふれあい」も第2位で「好き」とされる。

統計研究では省略した「近くの川、鉄道の、沿岸・沿線」の風景を「楽しんでいる」とされ、ともに「思い出」も多少あるとされる。

「関心事」については、勉強、仕事、友人関係、その他、「その他の家庭、家族に関すること」として「甥、姪の成長、弟、夫の健康」、があげられ、さらに、自身の心、身体、健康が、あげられている。また教育、環境問題、災害・事故があげられ、さらに哲学・思想、から 芸術、宗教が、あげられている。家族とともに「生」を営んでいる姿があり、社会的関心も高く、とくに哲学、芸術、宗教など、精神的探求の深いことが、示されているといつてよいであろう。

このことは次の「望んでいること」にも示されている。すなわち 選択された項目は「便利で快適な暮らし」「静かな暮らし」とともに「自分や家族の幸せな暮らし」「身近な人の幸せな暮らし」「身近な人の役に立つこと」「身近な人の迷惑にならないこと」となっており、さらに「学問研究」「その他の創造活動」と続く。また「人類の未来や地球保護」もあげられている。

これらについて本人は、面接・自由記述で「日本の神々について、各地の小さな神社を見て回り、氏子さんや宮司さんの話を聞きたい。地域に伝承される神話や神事などを取材したい。」と述べていて、並みでない「宗教的」関心を示している。また「芸術」に関しては「好きな草花や木々に囲まれて絵を描いて暮らしたい」と述べている（他の項目としては「何にもとらわれずにのんびり暮らしたい」も選ばれている。

5. 考察と今後の課題

以上の結果は、まず被験者の半数以上が大学生だということを、認識しておかなければならないが、そして現住所の入居期間も短いことを認識しておかなければならないが、それを踏まえた上で、自分の住んでいる住居に対して、「落ち着く」と回答しているものが圧倒的に多く（7割程度）、「無機質」だとするものが最も低いことから、住居以外の他の居場所に比べて、とにもかくにも自分専用の空間であり、自分に合った、馴染みのある空間であるとイメージされていることが示唆された。なお、3割程度ではあるが次に選択率の高かった「あたたかい」や「狭い」が、居住空間の心理物理的特性として一定程度即断的に判断できうるものであるのに対し、「落ち着く」が、比較的時間をかけた生活体験によって環境との相互作用を経て形成されるものであると考えられる。また、自分が望む生活目的では、「自分の家族の幸せなくらし」が8割程度の選択率を示しており、1割にも満たない「科学の発展における研究や貢献」などのような公共性の高いことを望んだり、その役に立ったりすることよりも、身近な周縁に関することが生活目的の中核になるものであることが示唆された。

それぞれの具体的な項目から、因子分析を通して、より潜在的なイメージ、またそれ故に抽象性の高いイメージを導出するに至り、住居環境イメージには、①平穏性、②開放性、③慰安性、④清潔性、⑤安全性の成分があることが想定できることになった。さらに、全対象者において平均得点の高かった③慰安性の成分は、他の成分とは異なり、損失を受けた心身の状態を回復する

機能を意味するものと思われた。また、そのことが女性である場合、年齢区分が31才以上である場合、そして居住年区分が5年以上である場合に、より顕著に感じられており、これらの属性に当てはまる者の居住環境のイメージにおける大切な評価成分であることを予見させるものであった。次に、生活目的イメージであるが、この成分には①家庭重視、②感性重視、③肩書重視、④学術重視、⑤消費重視、⑥平穩重視、⑦社会重視の7種類が想定できることとなった。そして、全対象者において平均得点の高かった⑤消費重視の成分は、ある意味では最も現実的な生活目的を意味するものと思われた。

単純集計とケース研究について補足すれば、「好きな場所」では、都市生活とともに自然が好まれていることも見てとれた。「好きな場所」として、繁華街、スーパー、ショッピング・モール」などが人気があるのは時代の反映といえそうで「趣味」についても、漫画、TV（を見る）ことなどが多いのも同様だといえるが、「趣味」について、読書、音楽鑑賞、音楽会、美術館、絵を描くこと、などは時代を超えた人間性を思わせる。このほか「望んでいること」として「人、自然とともに生きる心性」といえるようなもの、「自分や家族の幸せな暮らし」「学問その他の創造活動」「人類の未来や地球保護」「心の深みの探求」「人の心のニュアンスを感じとること」「自然のニュアンスを感じとること」なども、「人、自然とともに生きる心性」として、年代を超えて、より高齢の人々にも見られるもので、これまたおそらく時と処を超えて、しかも人間の深い、普遍的な心性につながるものとみられる。この点はとくに別論を設けて、探求したいところである。

参考文献（同一著者のものを一括、順序は最初の出版年の順とした）

- 藤岡喜愛 1974 『イメージと人間』 日本放送出版協会
栗田浩之 1977 「物質文化から見た現代家庭」『国立民族学博物館研究報告』vol.2-4
高田公理 1978 「現代日本人の環境観」石毛直道編『環境と文化人類学的考察』日本放送出版協会
高田公理 1979 「現代日本人の『くつろぎ』イメージの諸形態—不定型の『社会的なるもの』からの逃走」『季刊人類学』10-2 講談社
水島恵一 1979 「実証的かつ実感的体験研究の方法」文教大学紀要
水島恵一 1988 「イメージ心理学」人間性心理学体系 第9巻 大日本図書
上杉喬・佐々木正宏 1979 「カード式投影法による感情の意識研究」文教大学「体験と意識の研究1」
上杉喬 1981 「感情イメージの研究」文教大学 人間科学研究
泉敬子・佐藤ひろみ・中林みどり 2005-7 高合者の意識調査Ⅱ
鈴木賢男 2009 「感情体験について」文教大学「言語と文化」22
鈴木賢男他 2009 「『感情イメージ調査』についての研究（Ⅱ）—諸対象についての感情価尺度の因果論的構造と性格次元との関連性—」 文教大学人間科学研究代 31

注1) 本論作成にあたって、質問紙の作成・実施などで、多くの方々のご協力のあったこと、とくに文教大学の神田彦彦氏その他の教職員諸氏、根本淑子・内堀真紀子・吉崎武敏・岡本淳子・渡部純夫はじめ東京臨床心理研究会の諸氏、藤本裕明氏ら水門会の諸氏に感謝したい

注2) 「生活とイメージ」に関するアンケート項目のうち、今回用いたもの。

質問1-2、性別、年齢別（19未満、20代、30代、、と大幅な区分）

質問1-3、職業・（学生、生徒、サラリーマン、主婦、その他 に分類）

- 質問 1 - 4、現住所の居住年数（1 年未満、2-10 年、10-20 年、それ以上）
- 質問 2 - 1、現住所の住居環境（選択肢：8 項目）
- 質問 2 - 2、住居のイメージ（選択肢：16 項目）
- 質問 2 - 3、好きな場所、よく行く場所（選択肢：30 項目および自由記述）
- 質問 3 - 1、都会生活の好悪（5 段階評定）
- 質問 3 - 2、自然とのふれあいの好悪（5 段階評定）
- 質問 6 - 3、趣味（選択肢：26 項目）
- 質問 8 - 1、関心事（選択肢：34 項目）
- 質問 8 - 2、望んでいること（選択肢：24 項目）